

廬山慧遠の研究

——その人物像と実践行について——

都 河 陽 介

廬山慧遠（334-416）の浄土信仰は、源空『選択本願念仏集』に説かれる「浄土三流」の一つとして知られ、近代日本の仏教研究においても早くから注目されてきた。なかでも、慧遠の実践行については、称名念仏を実践する曇鸞等の流派と異なり、『般舟三昧経』に基づく「念仏三昧」（観念念仏）を実践していたとされる。また、その実践は唐代初期の浄土教者である迦才の『浄土論』において「終是独善一身、後之学者、無所承習」と評されるため、継承することの難しい高度な浄土信仰であったとする研究もある。

一方で上記のような慧遠の評価に全く問題がないわけではない。例えば近年、「浄土三流」のような日本からの遡上の中国浄土教に対する見方は疑問視され、同時代的な視野に立った中国浄土教研究の必要性が謳われている。このような研究状況に即して一部の中国浄土教者に対する同時代的視野に立った見直しは試みられているものの、慧遠の浄土教に関する同様の取り組みは未だなされていない。また、もう一つの問題は、慧遠が『般舟三昧経』による浄土信仰を有していたとされるのは近代の成果であって、中国の諸資料には一言も言及されないことである。この指摘は、すでに先行研究によってなされているが、現在のような慧遠像がどのような変遷を経て形成されたのかという問題は未だ明らかではない。そこで本研究は、『般舟三昧経』の実践をする慧遠像の形成過程に関する問題点を明らかにし、慧遠の活動していた時代の仏教の流伝状況や実践背景について論じることで、慧遠の浄土信仰を再検討することを試みる。

第1章では、慧遠没後から近代日本に至るまでの慧遠像に関する史資料を再検討し、通説とされている「『般舟三昧経』を実践する慧遠像」がどのような研究状況から生じたものか明らかにした。「浄土教者としての慧遠像」が形成されるのは中国の唐代初期ごろからであり、『高僧伝』以前には全く確認されない慧遠像である。また、唐代中期ごろには、禅宗においても「禅者としての慧遠像」が形成されるため、中国において「浄土教者としての慧遠像」として認識されるのは限定的な事例である。そして、近代日本においては、歴史的な検証によって

「禪者としての慧遠像」が排除され、「浄土教者としての慧遠像」が強調されるようになる。さらに『大乘大義章』の刊行や「浄土三流」の枠組みの中で慧遠の実践について議論されたことで、『般舟三昧経』の「念仏三昧」を実践する慧遠像が形成された。ただし、慧遠の使用する「念仏三昧」の語が無批判に浄土信仰の文脈で捉えられることや、後代に形成された慧遠像から遡上の慧遠の実践を検証することなどの問題点があることが明らかとなった。

第2章では、初期中国仏教の代表的人物である道安と慧遠の実践の背景について検討し、慧遠像に関する問題点を改めて指摘した。従来の研究では、道安や慧遠は後代の仏教者と比較して小乗大乘を正しく認識していないと主張されてきた。しかし、この主張は鳩摩羅什以降に中国仏教に定着する「小乗対大乘」という認識を適応したものであり、道安や慧遠は別の小乗大乘観を有している。それは、当時中国に到来していた瑜伽師の禅観経典を背景とした「小乗から大乘」へと志向するような認識であった。瑜伽師の禅観経典とともに中国へ伝来していた阿毘曇学では、菩薩になるための条件として見仏することが必須となっている。その条件について、慧遠も『大乘大義章』で質問しており、慧遠が菩薩になるために見仏することを求めていることを確認した。そして、慧遠の著作には「菩薩になるための念仏三昧」を主張しており、慧遠も閲覧していた『坐禅三昧経』にも同様の主張が確認できることを明らかにした。そのため、慧遠の実践していた「念仏三昧」も、『般舟三昧経』のような浄土信仰の念仏三昧ではなく、「菩薩になるための念仏三昧」であることを主張した。

第3章では、慧遠の浄土信仰について再検討し、慧遠は『般舟三昧経』に基づく実践をしていたのではなく、別の経典を背景とした浄土信仰を有している可能性を指摘した。慧遠の浄土信仰に関する資料を批判的に整理すると、慧遠が浄土信仰に言及しているのは「与隠士劉遺民等書」の一部のみであって、慧遠の「念仏三昧」の語句は浄土信仰の文脈で使用しているとは言い難い。また、『高僧伝』によって周辺人物の浄土信仰を検討すると、僧済及び僧叡の伝記から明確に〈無量寿経〉を信仰していることが確認できた。その結果を念頭に置き、慧遠の浄土信仰に関する文献と劉遺民「立誓文」について検討すると、『般舟三昧経』よりも初期無量寿経の往生思想に類似した内容が確認できた。よって、慧遠教団は全体で初期無量寿経を信仰していた可能性が高いことを明らかにした。

第4章では、中国に般舟三昧思想が定着する年代と変遷過程について論じ、中国仏教のどのような状況変化が般舟三昧思想と浄土信仰を結びつけたのかを明らかにした。『般舟三昧経』よりも後代に成立した経論は、『般舟三昧経』の教説を変化させ、念仏対象や機根観の多様化といった異なる特徴を持つ般舟三昧思想を展開していることを確認した。その検討結果を念頭に置き、中国における般舟三昧の実践者を概観すると、慧遠没後の五世紀前半ごろから伝記に登場しはじめ、六世紀後半ごろには浄土信仰と結びついていることが明らかとなった。また、

その定着には、『般舟三昧經』だけでなく般舟三昧思想を取り込んだ經論の影響が強いことを確認した。そして、般舟三昧の実践者が「普賢懺」や「方等懺」などの懺悔法を行うことに注目し、慧遠没後に滅罪を説く懺悔思想が流行することで、自身の清浄性を示す見仏として般舟三昧も定着していく過程を明らかにした。

以上が、本研究で明らかとなった慧遠の浄土信仰と中国浄土教史の一端である。慧遠は、後代の浄土教者と比較して閉鎖的な修行形態を有しているという理由のもと、非難の対象ともなってきた。しかしながら、本研究で示した慧遠の人物像は、多くの在俗者や弟子たちとともに〈無量寿經〉を信仰し、往生を願う念仏者であった。慧遠の浄土信仰は、その後継承されず、衰退していったとされるが、本研究の成果を念頭に、本当に慧遠たちの浄土信仰は衰退していったのか再検討されなければならないだろう。